

皆さんには、身近に怖い人はいるでしょうか。また、その場合の怖い人とはどういう人なのでしょう。かつて、怖いものと言えば、地震、雷、火事、親父と言われておりましたが、それも死語となつて久しく、ですから、周りを見回して、怖い人がどれくらいいるのだろうかとも思うのです。ただ、周りから怖い人がいなくなるということは、また別の意味でいかかかなものかとも思います。それは、かつて恐いと言われた人の多くは危なく怪しい人ではなかったからです。日頃の関わりの中で、この人はと、そう思わせるところがあり、それゆえ、恐い人と危ない人とが一緒くたにされることはありませんでした。ですから、そのように人との関わりが薄れ、言葉が混同され、薄っぺらな言葉ばかりがまかり通ることになると、物事の本質を歪ませ、その本質を見極める力を削ぐことにもなりかねないように思います。ただ、もちろん、意味もなく人を恐がらせていいということではありません。恫喝し、押さえつけ、有無を言わさず、ただ恐怖心だけを植え付けるものを認めるわけにはいかないからです。けれども、その上で思うのです。怖い人がいないということが私たちにとって、それが本当に幸せなことなのかと。

そこで、早速御言葉に聞いて参りたいのですが、この日私たちに語られていることはイエス様の怒りの激しさについてです。「イエスは、数多くの奇跡の行われた町々が悔い改めなかつたので、叱り始められた」と御言葉は語かたり、その上で、「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ」と厳しい調子で二つの町々に怒りをぶつけるイエス様の様子を記すのです。それは、この二つの町が、イエス様が長く活動したガリラヤにあったからです。他の二つの町にもっとの力を注いでいた方がましだったと言っているのはそれゆえのことでもありませんが、ただ、イエス様の怒りの矛先が向かったのはこの二つの町だけではありません。さらに激しさを増しているのはもう一つの町の方です。それは、その場所が、ヨハネが捕らえられたことを知った

イエス様が真っ先に向かった場所であり、また、神の子としての公の生涯を始めるにあたって、最初に訪れた場所でもあるからです。それが、ガリラヤにあるカファルナウムという町でもあります。それは、このカファルナウムがイザヤ書において預言された場所でもあったからです。

ですから、この町について御言葉はマタイの別の箇所でもこう記しています。「『ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川の彼方の地、異邦人のガリラヤ、暗闇にすむ民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が差し込んだ。』そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と行って、宣べ伝え始められた」とマタイではこのように語られているのですが、それは、この町にスポットライトが当てられ、そこで始まったものがイエス様による福音宣教でもあったからです。それゆえ、福音宣教とはすなわち、悔い改めと御国の到来を人々に告知らせることであり、それが、ここカファルナウムから始まったということです。従って、カファルナウムはイエス様の伝道活動における記念碑的場所であったということでもありませんが、ただ覚えるべきはそれだけではありません。復活の後、甦りの主が弟子たちとの再会を約束した場所がこのガリラヤでもあり、そもそものところ而言えれば、ガリラヤはイエス様の生まれ故郷でもありました。このようにガリラヤは福音宣教における重要な場所であったのですが、ところが、イエス様が格別な思いをもって関わったこれらの町々が、その意に反して悔い改めることがなかつた、イエス様が怒り心頭なのはそれゆえのことでもありました。

というわけですから、ここから分かることはイエス様の怒りの激しさだけではありません。その激しい感情の高ぶりは、同時に、この町々に対するイエス様の思い入れの深さを現しています。ところが、ここでは、この愛の深さが返って多くの人を戸惑わせることになったのです。そして、それは見た目の激しさだけではありません。怒りの理由がどうい

ものであれ、かわいさ余って憎さ百倍というの、これはいただけません。イエス様らしくないと思えるからです。しかし、イエス様の父であり、私たちの父なる神様は熱情の神様とも言われているお方です。つまり、一端火がついたら誰にも止めることのできない激しさを持っているということです。ですから、その激しさは父親譲りであったということでもありますが、それゆえ、私たちがこうしてイエス様と一緒に暮らしている以上、イエス様というお方が優しく、穏やかなばかりではないということを知っておくことは、知っておいて損はないように思います。

ただ、問題はここからです。イエス様はどうしてここでこれほどまでに怒りを露わにされたのでしょうか。その理由は、これらの町々が悔い改めなかったからだ、と御言葉にはありますが、しかし、何でもよくご存知なのがイエス様なはずなのです。ましてや、あのユダに対しては、これほどまでの怒りをぶつけることはありませんでした。それは、ユダの裏切りをご存知であったからです。ところが、それにもかかわらず、ここでこのような事態が生じているのはどうしてなのでしょう。イエス様はまったく想定すらしていなかったのでしょうか。私にはそれが不思議でならないのですが、では、この怒りは、イエス様の見当違い、見る目のなさを現しているということなのでしょう。つまり、そこはイエス様も人の子、目に入れても痛くないほどの思い入れの深さゆえの鼻肩の引き倒し、つまり、イエス様にもその目を曇らせるような偏りや歪みがあったということなのでしょう。けれども、もしそうなることが分かった上のことだとしたらどうでしょう。それについては、憶測が憶測を呼んで収集つかないことにもなりそうですが、しかし、恐らくは、どれ一つとっても、私たちを心底納得させるものはないのでしょうか。それは、どれも一つの可能性を示すに過ぎないものだからです。しかし、今申し上げたことを踏まえつつ、一つだけはっきり言えることがあります。それは、イエス様というお方がとって恐い一面をお持ちのお方であり、決して悔えることはできないということです。

ただ、イエス様が恐い、ということ、は、イエス様の一面を現すにすぎません。ですから、イエス様は恐い、恐い、

神様が恐い、恐いと、その一面だけを強調したところで、それで本当にイエス様を知ったことにはなりません。それゆえ、その逆もまた真なりということでもあります。つまりは、イエス様が優しく穏やかで親切な方であることを強調するのはいいとしても、それだけではないということをはっきりと抑えておかなければならないということです。そうでないと、それこそ、イエス様というお方が薄っぺらいものになってしまいますし、特に、最後のところでイエス様が「裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰ですむのである」と語っているように、イエス様を信じる私たちの信仰が薄っぺらいものとならないためにも、ある事柄だけを取り上げて何かを語ることだけは慎まなければならないように思うのです。特に、こういう時代であればこそなおのこと、この点に気をつけなければなりません。そうでないと、人の恐怖心を利用し、尋問するかのようになり、人を洗脳する、いわゆる、カルトといったものとの違いが自分自身でも分からなくなってしまうからです。ですから、そう考えるなら、今私たちを取り囲んでいる状況は非常に厳しいものであり、今まで以上に、自らの口で、また、その姿を通して、イエス様についてしっかりと世に伝えていかなければならない、今はそういう時代なんだと思います。では、それについてはどのようにすればいいのか、この日の御言葉を通し私たちに教えられていることは、その激しさに反して、それほど肩に力が入ったものではないように思うのです。

「悔い改め、福音を信じなさい」というイエス様のこの声を聞き、イエス様と共に歩み始めたのは、ここで厳しく糾弾されている町々だけではありません。こうして御言葉に聞いている私たちも同じです。では、その私たちが日々、一瞬たりとも神様から目を離すことがないのか、正直申せば、私には胸を張ってそう言える自信はありませんし、もちろん、皆さんも同じなのではないでしょうか。それゆえ、イエス様の仰ることをどこか誤魔化しながら毎日を過ごしている、それが私たちでもあるのでしょうか。ですから、悔い改めつつ毎日を過ごしているとは到底言えないのが私たちであり、それゆえ、ここで語られていることは自分自身にも当てはまるようにも思うのです。従って、この日の御言葉は私たちにもイエ

ス様に対する恐れを生じさせることにもなるのでしょ。そして、私たちがそのように感じるのは、もちろん、悔い改めつつ歩んで欲しいという、イエス様のその思いを受け止めているからでもあります。ただし、イエス様のその思いとしては、私たちの恐怖心を利用して信仰を奮い立たせ、意のままに操ろうとしてのことではありません。ここで言われていることは、確かにそう理解できるものでもあります。そのため、教会の外の人からその点について尋ねられれば、私たちも答えに窮することもあるでしょう。ただ、そうなるとういうことになるのか。今話題になっている宗教団体しかり、いわゆるカルトと言われている集団が概ねそうなのですが、彼らは、地獄、最後の審判、それに先立つ罪の問題というものを強調し、人々の恐怖心を利用して、思考停止の状態に陥れようとするのです。それがいわゆる洗脳と言われていることでもあります。もちろん、私たちは、彼らのような手法をとることもなければ、そのようなもの考え方をすることもありません。そもそものところで言えば、彼らの考え方が聖書の教えから逸脱しているかどうか以前に、人の心を弄んで、物事を優位に進めることを私たちは良しとはしないからです。けれども、それをしないとうことはとういうことになのでしょうか。それは、ここにこうして記されていることを曖昧模糊としたものに置き換え、現実と上手に折り合いをつけることではありません。御言葉にしっかり記されているわけですから、私たちはそれを誤魔化すことはしません。ですから、そういう意味で、ここに記されていることは、私たちの将来についての一つの可能性を示しているのは間違いありません。ですから、そうならないためにも、私たちは悔い改めつつ、日々過ごす必要があるのですが、ただ、できるとははっきりと言えないのが私たちでもあるのです。ならば、どうすれば、悔い改めつつ、私たちは御国に至るその道を歩み続けることができるのでしょうか。

そこで、私たちが思い、考えることは強い意志を持たねばならないということ。意志が強ければ、横道に逸れることなく、まっすぐに歩み続けられると、私たちはそう思っているからです。そして、もちろん、意思を強く持つことは大事なことです。何か大きな目的を達成し

ようとするなら、気持ちを強く持ち続けることは必要なことだからです。それゆえ、誰でも始めは、御国に入る日まで、と、そう強く悔い改め続けることを願ったはずなのです。ところがどうでしょう。あれっと思うことが多くなり、まっいいかと思う日が続き、いつの間にか、悔い改めのくの字も頭の中に浮かばなくなってしまうた、それは、ここで強く叱責されている町々だけでなく、私たちも同じなのではないでしょうか。ですから、なおのこと、私たちは強くそのことを意識しなければならぬと思うのですが、では、その意思の力をもってして、それを続けることが本当にできるのでしょうか。その答えは皆さん一人一人の胸の内にあるように思うのですが、ちなみに、私には、強い意志を持ち続ける自信はありません。それが偽らざるところでもあります。しかし、そうであるからといって、ここで語られているイエス様の言葉を曲解し、自分に都合のいいように解釈し直すつもりもありません。それは、私たちが神になり代わることと同じことだからです。

イエス様が強く求める悔い改めとは、私たちの信仰においては、一般的には神様の方に向きを変えることだと言われています。そして、それは、イエス様を受け入れるということでもあります。まただから、そのイエス様を拒めば、当然、神様の方を私たちが見ていないとうことにもなるのです。イエス様から強い叱責を受けている町々が、ここで「悔い改めなかった」と過去形で語られているのは、イエス様がその町を去ってから早々に別の方を見てしまったからでもあります。けれども、別の方を見ていたという点では、イエス様の弟子たちも私たちも変わりはありません。しかし、弟子たちがそうであったように、イエス様の弟子たる私たちには、そのような時、また別の言葉が備えられているのです。それは、「悔い改めなさい」と私たちを神様の方へと促すための言葉です。そして、この言葉は、強い意志を持ってない私たちを叱責し、その責任を追及するための言葉ではありません。なぜなら、そもそも私たちが強い意志を持ち続けることができるくらいなら、イエス様が十字架に付けられることはなかったからです。しかし、イエス様を十字架に付けたとう責任は私たちの側にあるのは間違いありません。そのため、私たちはその責任

をとらされないかと怯え、あるいは、その責任から逃れようとして、「神様は愛の神だから」と言って高をくくり、うやむやにしたりもするのです。ですから、私たちが強い意志という考え方をもちだしてしまうのはそれを潔しとはしていなからでもありますが、けれども、それゆえにまた思うのです。ここで強く叱責されている町々は、もしかしたら、私たちと似たような努力をしようとしたのではないかと。ですから、そう考えるなら、ここに記されていることは、信仰の夢を追い、夢敗れた人々の姿だとも言えるのでしょうか。ならば、私たちはどうなのでしょう。

自らの意思の力をもって、何かを克服しようとする時、その主人は神様ではなく、私たち自身です。それゆえ、自分ではどうすることもできない理由で道から外れることになったら、その責任は私たち自身にあるのは間違いありません。けれども、そこでなぜどうしてと責任を追究されて、それで本当に何かが変わるのでしょうか。ある人は、そのように責任だけを追究し、人を追い詰める言葉を「尋問する言葉」と称しておりますが、それは、アルコール依存症然り、ギャンブル依存症然り、その弊害として現れる様々な問題性は、その責任を追究するだけでは何も解決することはないからです。そして、それは、私たちの罪においても同じです。そもそものところ言えば、この罪という問題は私たちには克服可能なものなのでしょうか。しかし、それにも関わらず、神様はその私たちのことをお赦しくださったのです。それは、私たちの罪がすべて解消されたからではありません。罪あるそのままをイエス様を通して神様が引き受けてくださったからです。だから、私たちはこの神様の赦しに気づき、神様の方を見ることができるようなのです。

従って、悔い改めよとの呼びかけは、5時になれば辻辻のスピーカーから流れる、あの隣の町にいたら聞こえないような呼びかけではありません。そういう言いっ放し、やりっぱなしのものではなく、イエス様の呼びかけるその声は、イエス様がいますとところでしか聞こえないものなのです。ですから、そういう意味では、普遍性はありませんし、一般的でもありません。けれども、私たちはイエス様のその声を間違いなく聞いているのです。それは、イエス様がいますと

ころに共にいるからです。そして、この一緒にいる、共にあるということですが、このことは、私たちが決めることではなく、イエス様がお決めになることであり、そして、それが許されているのが私たちでもあるのです。ところが、ここでイエス様が糾弾している町々はそうではなかった。それは自分ですべてを決めようとしたからでもありますが、そのため、夢破れて共にあることに背を向けてしまった、諦めてしまったのです。つまり、イエス様の居ないところを自ら選び取ってしまったということです。けれども、ここでの激しさがその思い入れの深さの裏返しであるように、その怒りは町々との関係性を断ち切ろうとしてのものなのでしょうか。その愛の深さゆえに、父なる神様と同じ方法をもってして、何としてでも自分の方に振り向かせようとしている、それが私たちのイエス様であると思うのです。ですから、その根底にあるものは、放蕩息子の譬えに記されているものと同じです。

ここに記されていることは、私たちが恐いと思う人をただ恐い恐いと言って恐れるだけのものではありません。敬愛し、畏怖する気持ちをより強く感じさせるものであり、それゆえ、その根底にあるものは、見捨てない、手放さないという深い愛でもあるのです。ですから、ここでイエス様が仰っていることは私たちを震え上がらせることがその目的ではありません。その根底にあるものがイエス様の愛であり、この愛に対する気づきを与えるものでもあるのです。従って、私たちを責め立て、無理強いし、回心を迫るものではありません。神様とイエス様の愛に囲まれているとの気づきが私たちをして自ずと神へと向かわせる、私たちはそういう交わりの中を生きている、この御言葉が知らしめていることは神様とイエス様の愛の深さであると同時に、イエス様との交わりの中に、私たちが確かに置かれているという、この事実を知らしめていると、私はそう思うのです。ですから、主にある交わりの中にあることをもう一度しっかりと心に留め、新しい一週間を過ごす私たちでありたいと思います。祈りましょう。